

10. ホウオウボククチバ

Pericyma cruegeri Butler

基本データ

1) 原産地

不明

2) 沖縄県における発生地域と宿主植物

1986年石垣島、宮古島、沖縄島、南大東島
宿主植物はホウオウボク *Delonix regia* やコウエンボク *Peltophorum pterocarpum*、ランブータン *Nephelium lappaceum* L. (Szent-Ivany & Catley, 1960; Kuroko & Lewvanich, 1993)

3) 被害木の症状

本種は葉を好んで摂食する。また集団で加害し、かつ食欲が旺盛なため、加害されたホウオウボクは葉を全て食い尽くされる。

4) 発生消長

幼虫は、通年発生しているが、6～11月に発生が多くなる。特に10～11月に発生ピークを迎えるが、発生年や発生場所により発生量や発生時期に差がみられる。大量発生は2、3年に1度といわれている。



ホウオウボクの食害



ホウオウボククチバの幼虫

日本国内における病虫害の発生地域と主な宿主植物

小笠原で本種による加害がコウエンボクで確認されている。

海外における病虫害の発生地域と主な宿主植物

オーストラリアから東南アジアにかけての熱帯地域に広く分布 (杉, 1987)、1971年以降、グアム島、ハワイ州でも確認されている。ホウオウボクやコウエンボクを含むジャケツイバラ亜科 (Caesalpinioideae) を加害する。

1) 特徴

ホウオウボククチバの幼虫は、マメ科ジャケツイバラ亜科のホウオウボクの葉を好んで摂食する。本種は集団で加害し、かつ食欲が旺盛なため、加害されたホウオウボクは葉を全て食い尽くされる (写真-1)。

本種は、5月～11月をピークに幼虫が発生するため、繰り返し加害されたホウオウボクの中には衰退するものもある。大量発生は2、3年に1度といわれている。

雄は前翅長 17～20mm、体長 16～21mm、雌は前翅長 14～20mm、体長 16～18mm である。雄の触覚は長さ 7mm



写真-1 ホウオウボククチバによる被害

ほどで、中央部がやや膨らみ両側方に扁平である。雌の触覚は長さ7~9mmで、雄に比べ細く中央部の膨らみは見られない。雄の腿節と脛節には長毛が密生しているが、雌では雄に比べ毛が短くやや疎らに生ずる。これら二点の性徴によって、雌雄の識別は容易である。翅表の模様と色調は、灰褐色から黄褐色を呈し、前後翅ともに全面に多数の波状線を有するが、雌雄ともに個体変異が極めて大きい(写真-2)、(下地ら, 2007)。

卵は、ホウオウボクの小葉の表面のやや先端に近いところに一卵ずつ産卵される(写真-3)。卵の大きさは直径0.9mmほどで、ほぼ球形で淡黄色を呈しており、表面には2列に並んだ小顆粒の縦筋が見られる。

蛹は、体長17~20mmで黒褐色を呈する。尾突起は棍棒状に発達し、末端には先端がカールした2対の釣り針状の尾刺毛とさらに強くカールした2対の小尾刺毛を有する。

2) 生態

ホウオウボククチバの幼虫は、通年発生しているが、6~11月に発生が多くなる。特に10~11月に発生ピークを迎えるが、発生年や発生場所により発生量や発生時期に差がみられる。

幼虫はホウオウボクの小葉を300枚以上摂食するとされており、1齢から5または6齢を経過し、終齢幼虫では頭部が赤く変色する。

蛹化の際には、刺毛を自ら吐いた糸に絡ませ蛹を固定する。発生初期や個体密度が低く枝に葉が多数残されている場合は、枝先の葉や小枝を少量の糸でつづってその中で蛹化するが、着葉量が著しく減少した場合は、樹皮のわれ目や窪み、支柱のすき間や下草の間などで蛹化する(写真-4)。

3) 沖縄県における発生の現状と侵入・発生の経過

本種は、1986年に石垣島で初めて大量発生が報告されている。2000年には沖縄島で大発生が確認され、2001年には小規模な発生、2003年、2005年に大発生が確認されている。2005年には宮古島での大発生が報道された。

ホウオウボククチバの発生には、天敵による密度調整がされていると期待され、これまでに、寄生バエ2種が終齢幼虫と蛹から確認されている(下地ら, 2010)。



写真-2 ホウオウボククチバの雌雄成虫
(上♂、下♀)



写真-3 ホウオウボククチバの卵



写真-4 支柱の隙間のホウオウボククチバの蛹

4) 診断

ホウオウボククチバは、ホウオウボクの葉を葉脈を残して食い尽くす。また、樹下の路面が虫糞で茶褐色に汚染されるので、診断の目安になる。

5) 防除

①方針

本種の加害によりホウオウボクが枯死に至ることはまれであり、天敵による密度調整がされていることが示唆されることから、基本的には薬剤を使用した防除はしない。

公園や街路など、人の往来の多い場所で発生した場合、美観を損ねること、近隣住民からの苦情が多く寄せられることもあり、大量発生が確認されたところでは強剪定による対応がされている。しかし、連年、繰り返し強剪定を行うことでホウオウボクの樹勢が低下することが懸念されることから、幼虫の補殺を行う。

②研究

本種の生態については海外においても詳しい研究がされておらず、2005年から海洋博記念財団（現一般財団法人 沖縄美ら島財団）において生態及び生活史、天敵に関する調査が実施された。

その結果、前述のとおり本県におけるホウオウボククチバの生態や生活史、天敵となる寄生バエの存在が確認された。しかし、ホウオウボククチバの大量発生が断続的に発生していることから、引き続き、生態、発生量の増減に関与する因子の検討や新たな防除技術の開発を行う必要がある。

[引用文献]

下地俊充, 佐々木健志, 宮城好二 (2007). 沖縄県内におけるホウオウボククチバ *Pericyma cruegeri* の生態について. 熱帯植物調査研究年報27, 73-76.

下地俊充, 佐々木健志, 宮城好二 (2010). 沖縄島におけるホウオウボククチバの生活史と天敵について. 熱帯植物調査研究年報30, 33-36.

杉俊郎 (1987). 石垣島で大発生した *Pericyma crueger* (Bulter) ホウオウボククチバ (新称). 誘蛾灯107, 5-8.